

連作小説 8

母、 見える

二十四歳で結婚したハルカは夫の理解を得て、自分の親と同居し、息子も生まれ、理想の結婚生活と羨まれていた。しかし年頃になった息子はグレ出し、夫からは思いがけないことを告げられ……。

群ようこ

二十四歳のハルカは、勤めていた会社に入入りしていた、取引先の営業担当のツヨシと恋愛結婚した。彼はランニングが趣味で、日に焼けていて、いつも明るくはきはきして健康的で、ハルカにとってとてもまぶしい存在だった。結婚の話が出たとき、一人娘のハルカは、自分が家を出ていいものかと悩んでいた。父が四十五歳、母が三十九歳のときの子で、友だちの親に比べて二人は十歳は年を取っていて、両親の老いに関して敏感にならざるをえなかった。当時から持病があった父は入退院を繰り返していたし、新婚生活を送りながら、結婚後も仕事を続けて、そのうえ実家を往復して母の手助けをするのが、自分にできるか自信がなかった。母は、

「ハルカの好きにすればいいよ」

と聞いていたが、その裏にそうではない気持ちが含まれているのも、ハルカにはわかっていった。いまひとつ表情が晴れ晴れしない雰囲気を感じたツヨシが話を聞き、自分がハルカの実家で同居するとあっさりといってくれたので、ハルカは、本当にありがたいと彼に感謝した。その話を母にすると、

「あらまあ、新婚さんが同じ屋根の下にいるなんて。私はどんな顔をしていたらいいのかしら」

と笑っていたが、うれしそうなのがハルカにはよくわかった。遠方に住んでいるツヨシの両親からも特に何もいわれず、結婚式も滞りなく終わった。ツヨシは新婚旅行中のハワイでも、早朝から走り続けていた。運動が苦手のハルカは誘われても断り、彼が戻ってくる間、ホテルのネイルサロンに行ったり、買い物をしたりしていた。帰国直後にハルカの父が急死したのは残念だったが、それ以外は順風満帆だった。

結婚三年目には、長男のタケルが生まれ、育児休暇制度を推進していた会社の元の部署にも戻れた。友だちからは、

「ハルカはうらやましいわ。ツヨシさんが実家に住んでくれているし、勤めている会社も理解があるし。理想だわ」

といわれた。母はもちろん、夫も会社から帰ると家事をしてくれた。帰りが遅くなり急いで家に帰ると、ハルカの分の食事が準備されていて、台所で息子を背負った母と、夫が肩を並べてお皿を洗っていたりしていた。

「いい人と結婚してよかったねえ。あんな男の人はどこを探してもいないよ」

母は何度もハルカにいった。

休みの日は家族四人でよく遊びに行ったし、タケルもこれといった病気もせずに元気で育ってくれた。小学校の成績もよく、ハルカとツヨシも期待していたが、タケルが中学校に入ったとたん、徐々に様子がおかしくなってきた。服装の乱れや成績が落ちたわけではないのだが、祖母とはともかく、親とはほとんど話さなくなってしまった。小学生のときは無邪気に、

「お父さん、お母さん」

と明るい顔でとびついてきたのに、話しかけても目を合わさず、返事もしない。心配になって担任の男性教師にたずねると、

「学校では何の問題もなく、みんなと明るくやっていますよ。年齢的なものじゃないですか。タケルくんは心配ないと思いますけど」